

死するの九方五子餘人といふ小田井宿の障子一両風強くして遊不病一安室一とあり昔天治元年七月あゆむくのかきさるゆへり一由中者紀あふさるり又元禄十三年十二月あゆむ此山焼くれとも以年の如くあゆむさるり一とあり

江戸もとも硫黄の香りの川水中川より引往一通一保豆の海辺と煮く濁る依て芝浦築地渡船の辺より今も津浪起るとて大に騒動一佃島の男女まを擧ら尺雜具と運入る

○此頃綿糸價貴一夏より秋迄霜冷き一と帷子と着る日少

○七月十日より芝居宿地内にて奉新五自自性院延念地蔵尊

○葛為半田稲荷社修儀勅化

○八月十五日亥の

刻月蝕日食

○九月十日書家小河保秀卒

○九月十五日神田明神祭礼の時神主郡より神樂を十番と十一番の男

一渡をり當年々始る

○十月廿八日曉八時小借町よりお火大風あり

大借町通該意町田所町若若川町塩江町小細町幸丁目辺場町葺後町迄奉船町小田系町室町旗姥町生外敷町焼亡日午刻迄

○十一月書家松山天燒卒

○十二月廿日己の刻色淡草なる越より

○十二月廿二日書六半時坊上寺方火燒失

○秋の節力冬小延て寒中お身終る今年より始る

天明四年甲辰 正月間

正月二日夜青山麻布辺又火日夜四谷新宿焼亡

○閏正月廿三日曉八半時神田飯沼町二丁目

より出火鶴町為横町白磁町堅久二町新石所二丁目塗師町焼亡

○二月初午鳥森稻荷系出練物出象

○二月より四月廿日迄中の々

如名滿寺聖徳太子開帳 ○二月小川町三條稻荷の神開帳 ○三月十五日  
より五月五日迄田向院少く相州關本最寄の道了権現開帳 ○葛西花文  
村正寄の勢大明神開帳 ○三月廿日弘法大師九百五十年忌 ○川傍奉方  
の弘法大師開帳 ○獲ふる護持院弘法大師遠居を什物開帳  
○永代寺之山城宇治平為院縣社奉祀如名滿親世寺開帳 ○牛込奉満寺  
少く中山信花住持の奉堂祖師 開帳 ○法名寺奉法寺少く依後難不  
郡小濱村妙宣寺祖師開帳 ○龜戸天満宮開帳 ○四月より子訪谷鬼子  
母神開帳 仙壽院 四月より深川靈雲院少く京泉涌寺松邊如來肉付  
佛舍利開帳 ○四月十日茶人清水玄昌卒 下谷龍泉寺 ○四月十六日刻  
若原水道尻より出火廓中焼亡 飯室南の山田向院奉儀堂 ○四月廿日高  
英答卒 宇二才墓刻の上より 〇諸國肌體時疫仍れ人多死を

〇五月二日萩原宗固卒 八十二才名貞辰百花園と号し法光院の隣にあり鳥光榮との由  
門人多く和氣と云ふ其年ありは谷荒木横町と名して卒せり  
〇六月春日古実者伊勢貞史卒 七十才号安富 〇六月十六日儒師井  
上金裁卒 辛未名院の神文卒 〇八月十六日國學者為田沖風卒 五十七才稱高橋  
〇九月十五日より十月十日迄千住為服少く野島清山と北條為開帳  
〇九月十八日後叡氏十二代迎奉卒 〇十月より五年の習仙齋少く南鏡と為  
らる 〇十一月桐長相芝居櫓を改し時馬櫓と云は言とあり 〇十二月六日夜太白星歳  
是昔の女房の 送風ありといふ 〇十一月東本願寺奉堂再建棟上 〇十二月六日夜太白星歳  
星を祀る 〇二月十一日五車と祀る 〇十二月廿六日夜戌下刻八代海川  
原より出火為小風烈しく大石小路杉櫓救舟登櫓弓町御座下辺八官町  
の辺尾張町より本松町芝居仙齋廣高藩邸の辺北の京橋辺迄狭焼側築  
地海を為奉形南小田原所迄迄焼惣廿七日申刻深助町邊を火燒く

大小名藩邸町並みのり追敷しき焼亡之○十二月廿九日儒師并る茶亭  
号信命  
儀主久松より小暮  
○十二月廿八日夜赤坂氷川町より出火麻布長坂辺中を焼亡

天明五年乙巳

二月十五日日向院より總舎移居する石動寺開帳○同日より日向院より皇洲  
八丈島為朝明神本地地蔵并開帳○三月より洲崎新才久平開帳○八月より  
江之橋中の宮寺より開帳江之橋より系猪寺より○浅草妙善寺より之の江崎橋

寺祖師開帳○三月廿二日儒師清田若錦卒六十七○二月十日福王雲峯卒七十三  
名信成孫茶  
若松屋

養老寺の二号白鳳といふ英造の画を善の空庵の所より○九月廿二日小川春山卒六十八  
名信成孫茶  
若松屋

徳の園を画するの巻物幅未敷るなり深川の所より小暮より○九月廿三日曆学者大場昌明卒七十一  
名信成孫茶  
若松屋

惜ひ外十七才より卒小石川光岳より小暮より著書二冊あり○同廿五日儒師石川秀範豊信卒七十四  
名信成孫茶  
若松屋

○六月朔日より九月朔日追日向院より之儀我清涼寺新迎如來開帳  
防長権守小暮  
若松屋

武江年表卷之六  
武江年表卷之六  
武江年表卷之六

○六月十五日より湯島社地より武井野高地  
武江年表卷之六

○七月十日儒師大鹽教龍卒七十五  
名信成孫茶  
若松屋

○八月十日和藤枝直為卒七十六  
名信成孫茶  
若松屋

○九月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○十月十九日儒師久保忠成卒七十七  
名信成孫茶  
若松屋

○十一月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○十二月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○一月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○二月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○三月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○四月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○五月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○六月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

○七月十日より深川靈雲院より水戸祇園より人越禪師大昭將  
名信成孫茶  
若松屋

正月元日丙午未午一刻より未一刻迄日蝕皆既闇夜の如し

○正月廿二日昼九時陽島天神裏門外牡丹長家より出火西水風烈しく三組町妻急社神田町神門外兼風閣より後藤町辺内外神田より通町筋本町通日中橋迄東小田原町堀江町小畑町堺町葺屋町出屋其居兼進辺大橋町町小橋町所喰町淡所津川一飛火熊井町相川町大島町辺八幡宮一を居仲丁辺焼亡翌廿三日曉迄の聖堂神田町神門本社射り移る

○正月廿三日風烈しく午刻西久保大養寺の寺より出火赤羽版倉町を焼失す院の光明寺の光院其外焼亡後より飛火して田町海岸迄焼く申中刻迄幅三丁長十五町とりの山○同廿四日夜村茶川宿三百軒の餘焼る○同廿七日午刻本所四ツ目より出火釜屋迄焼る○同夜平川河門外出火あり

○二月二日荷田善満の女茶生卒卒才園學小女一和女也○二月六日午刻五

小石川蓮華寺より指谷町二丁目より出火乾風強く丸山辺河町幸代元町

茶水春日町新焼款五所に移る○同院より上総玉手田村称念の遺次

経院如來園焼○谷中延命院七面町村茶焼○二月廿三日相筋新橋山崎動

く女日日の以地震甚しく一日百度計震ひくと云○三月より權國を觀せざる

閑焼○三月十五日夜中雪降り梅の花は残る○三月廿二日降瑞穂語元祖

高橋賀若狭掃死古才林在吉藩判官と雀海との山○早春より四月の米迄

雨あく日烈風あつく諸人火災の怖の多きを安きころを

○五月の以より雨多し隔日の振ありしが七月十二日より別々大雨降續け

山水何れも大水と成り

十三日十四日より牛込小日向町あり石切橋辺武家方登陸連人々水勢を急ぐ橋の橋より由木村田上水掛橋危く大勢の人を以て移りしが後水樋の上より大川水ありしが十七日十八日よりカヤノ減りより目白山崩れ上水樋の崩れ一月の餘迄り目録橋崩遠橋危く和泉橋の橋板石流り十九日より大川水位出お小橋系の水五尺も下りて水位大橋板木面を掃り崩軒連水あり本所深川の家を流り平井交地辺水一丈三尺と云大川橋も水橋危く

十五日世系第の十七日昼時大橋中の石垣間流矢永代橋古名松流矢隅田堤（石垣が崩れ）を  
押切男女が河へ向け両橋を渡り途着り横濱辺の石垣を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を離  
目谷大水とて怪人なりは谷牛込辺に居るなりは水の上を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を離  
石垣崩れの崩れれば崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時  
十日あるに濱小橋へは救小舟と連られ被災を救せし十九日より晴天となり市日より  
水少しとて後てその深川へ船渡りあるに園八を在るに近玉の洪水にこそ小舟ごとく草紙に居し  
りていとも水の上を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時  
更相の船渡りく相渡りせし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時流矢を吉原の橋へ水の上を崩れし時

○夏より冬あけより諸國に饑饉人困窮す○七月中旬江戸中橋へ油賣切

○懐石の月院門ありて市と市との間の東藩の根を以て割麦の如く製し

又食として又葛の如く製して食料にも糊にも用ふべきをみ 官許を

りて九月の末より在るに流及迫も賣らむ ○青山橋太系に鯨を橋より以

鯨は権左傳於何某とていつる古き碑あり畧してその石を持たるよりの層

應二年丁卯八月九日とありてその碑を安徳大権現と定む今年何として

り東條人多りりてとぞ

天明七年丁未

正月十六日御人木丹車 （二十九日廣畑中） ○正月十七日昼八時青山より

出火西南大風権左系鯨が橋十日谷辺に於燒 ○二月南鯨人親遊蘇雲右

傳つ十三回忌の時舟は急流にたふす深川永代と八幡宮の後小雲右傳

つたりの大お等しき碑を立る （三十七日寺） ○二月八日医師山田園南卒

卒余才名正珍林宗俊精作と名あり （大黒丸平文と推定） ○二月廿九日御人珠屋居士卒 （名師老号百松）

谷中寺南ありて葬り （主人甚老松志） ○五月屠猪存高谷谷渡寺親高半一親政猪半太徳退治の圖を

は （横二間堂九尺ありて一以額ふ付くをこの浮刺あり甲冑の外故実をたひし）

画する額を納む （自由に入られと言画を調もせるふありて人物の活動普通の画匠のなふふあり）

○五月あけより米穀の値あがりて市價も高し市中の春米も高し

あがりて門戸を閉じ廿九日連雜人米肆酒店に米穀を焚く （焚く一人の大若虎ありてとよ小家世畧談を打てて其後）

たる家々を打毀り事夥し （焚く一人の大若虎ありてとよ小家世畧談を打てて其後）

官麻より嚴しく制し以町々て又竹柵を據一教を固嚴室あり一六  
 暫時に結なり ○五月賊民に逃去とて金子を擄り六月米大豆中並を以て  
 費しめらる ○八月十三日儒學者小沢宗江平 名政教條多門駒込 浩如古小蘇以 ○八月廿日  
 書家伴松長林平 字万年号匡山 漢字平字小蘇 ○八月廿二日谷中感徳寺境内に於て  
 東叡山時の鐘を鑄改む日月廿八日暮迄始て撞く ○九月七日能治師  
 聖中庵藤太平 七十六大島氏名陽喬空齋居士 与長津川要津古小蘇以 ○九月十二日井の水毒ありとい  
 不妖言ひらるる ○十月九日曉卯刻に吉原角町より出火して廓中燒く  
 冷焼亡花川戸近敷燒以 板本大橋側津川村北八幡坊中御富永町古輪あり 之がりの名居の足がみりとのひよわらぬは宅留人  
 ○林田の林宗礼十月あたる再延引く十二月三日山邊の菅野の爲燒る  
 天明八年戊申  
 正月元日大雪路 ○正月廣東人奉賣買止ありしをゆるくあり

○四月朔日より深川津むさあく身延山祖師開帳 ○月十五日より淺草  
 店 うく池上旅立祖師開帳 ○四月十一日夜戌刻光物飛ぶ登の如く  
 ○五月八日儒師大江維翰卒 東師の大江實衡が子 其天徳寺小蘇以 ○六月十二日英一蜂卒  
西の谷老 ○七月十六日書家植柳季梁卒 名棟号然居士 漢字清永古小蘇以 ○八月廿一日書  
 家関教明卒 号東山 林杉菴 小日向林名古小蘇以 ○十二月寺院に命りぬに淺間山燒奥州  
 飢饉疫癘因東出水系於大々燒死溺死お禍小罹くしもの為不施絲鬼  
 と修せしめらる 江戸の幸新田向院小松川仲春院あり未だ大火といわぬ今年正月晦日洛東 因東より出火して洛中洛外大肉と肉をとりこの大災の身と委曲ふ 為しと花經系於形と形を板本三卷あり 又大興禪師平安齋依の記をりりる  
 此年間に記事  
 天明の頃名家△儒家金裁旭山 芝山北海 崔鳴鶴山 △詩人西野僧  
 六如 名慈庵 △書家其寧東江親和 改巖 韓天壽 牛山 △和歌 千蔭

春海 自寛 重昭 瑞香 林 画家 宋笠石 嵩谷 嵩溪 荻谷

山島 秋山 俳諧 蓼太 完東 舟斎 珠東 得器 金羅 貫河

香武 祇干 白雄 狂哥 四方 赤良 朱樂 菅江 元の本 石 大庭 夏屋

宿屋 飯盛 藤津 初太郎 鈴屋 金持 さら 綿鶴 戲作者 通矢 三

二意 川真町 芝全交 万象亭 二代目 鳳来 唐来三和 右の人を 戲化若

の六家 藤といふ 可笑七珍 万宝 若の 廣九 觀水堂 大阿 芝菜 樹下

石上 ありて 河の あり 江戸 降福 瑞他若 紀の上 太郎 菊 萬亭 二代目 福内

相貫 四容 揚徳 玉泉堂 鬼服 舟治 馬馬 舟外 琴曲 山田 檢校

八人 藝川 高哥 命 仍り 實子 小舟 遊 あり 天明の 以地 口の 変態 あり

緒 ありといふ 業 あり 天明時代の 中 あり 物を 集り 江戸 名物 藤子 とい

歌せる 茶 紙 あり 合巻の 画 あり 月 二七 記 あり 味 あり 結 あり あり

△高比呂尾 髪 髪 髪 △油 明 紅 繪 △白 木 呂 眼 △本 町 益 田 目 末 呂 香 △旅 芝 塗 物 △清 水 亭 復 徒 △初 化 俗

△茶 枝 花 茶 △清 芝 茶 茶 △芝 三 宮 館 △横 町 系 茶 館 △孫 六 步 所 茶 館 △清 芝 茶 市

△三 七 坊 △吉 泉 朝 日 の 亭 △入 茶 女 館 △月 尾 館 △福 田 富 士 園 館 △廻 町 助 茶 館 △三 七 茶

△藤 重 吉 清 館 △未 取 館 △長 坂 元 結 △和 井 傳 吉 泉 館 △個 高 友 △吉 泉 吉 林 樂 △廻 町 助 茶

△陽 崎 常 人 茶 館 △清 芝 茶 館 △料 理 茶 屋 あり あり 首 西 太 郎 あり あり

△大 志 孫 四 郎 あり あり 武 元 隆 権 三 郎 あり あり 甲 子 屋 あり あり 四 季 菴 あり あり 二 七 茶 屋

△永 生 あり あり 世 町 あり あり 井 屋 宗 助 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△山 内 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 做 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

△お 様 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり



此  
井

寛政の事 ○下谷に焼く屋中楓樹教林ありて毎秋斜陽を惜むの名所ありといふ  
これあり ○昔に紅葉ふらふといふ處ありてゑのりてゑのりてゑのり ○堀貫井の事昔は深  
き一申古より不詳 始りてれど武家よりこれありて一價九金二百を賣けける  
在市中より高家ありてはほりてゑのり ○堀貫井より井戸掘工を以  
て簡易の法を以て速く掘り價も又下直に近ければ江戸中堀掘井を以て町毎ふ  
大くこれあり 元禄の江戸赤子小堀町に横の井といふありて冷みあり日本橋より始り井は  
ありて中堀家の主堀木の井を穿て清水の人も賣り是を以て子孫おひつる後ふ世の堀木と稱す  
井といふは元禄のころより堀井といふは元禄のころよりありては堀木といふは元禄のころよりありて  
田圃のありより堀りてゑのりてゑのりてゑのり ○堀貫井は元禄のころよりありては堀木といふは元  
禄のころよりありて堀りてゑのりてゑのりてゑのり ○堀貫井は元禄のころよりありては堀木といふは元  
禄のころよりありて堀りてゑのりてゑのりてゑのり ○堀貫井は元禄のころよりありては堀木といふは元  
禄のころよりありて堀りてゑのりてゑのりてゑのり ○堀貫井は元禄のころよりありては堀木といふは元

武江年表卷之六終



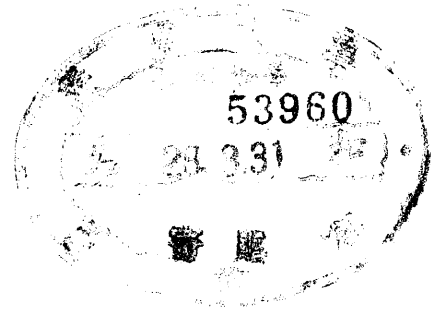
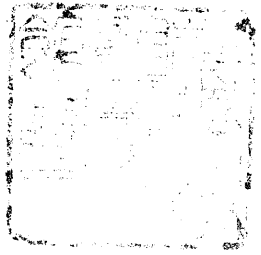
武江年表

七

五六  
八

210
7

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7



武江年表卷之七

寛政元年己酉

正月廿五日改元 六月国

○天明七八年の頃より碑文谷法花寺の仁王菩薩が成就をとりて貴族男女系譜を事なり次子不群集夥なり十二年より一七七九年を以て終りたり

○二月廿五日改元 ○米穀豊饒あり ○永代寺小成田山不動尊を修葺

○五月十九日 儒師入江北海卒 名貞孫ふ右膳つ 下谷為掃も以事たり

○七月七日程奇師卒 通称倉橋幸平 著書に画作あり

○八月八日大風雨家屋を損壞深川辺大水 ○八月市谷光徳院より川口湯村より地蔵寺開帳 ○前船人谷風槐之助小野川善三郎横綱免許又

閏六月  
十七日  
目白  
長谷寺  
竹生島  
母才天  
觀世音  
開帳